

新五カ年計画における農業発展の目標

丸 毛 忍

(一)

ソ連は一九五一年から戦後二回目（通算すれば五回目）の五カ年計画に這入り、現在その第二年度を終ろうとしているが、新五カ年計画の全貌はさる十月開催された第十九回共産党大会で初めて明かにされた。とりあえず大会の資料を利用して新五カ年計画における農業発展の問題点、計画目標、計画達成の諸條件などについて簡単な解説を試みておきたい。資料はゴスプラン議長M・Z・サプロフの報告「一九五一―五五年間のソ連発展第五次五カ年計画に関する第十九回党大会の指令」の農業の項に主としてより、その外、この報告に関する農相I・A・ベネディクトフと調達相P・K・ボノマレンコの「討論演説」および党中央委員会書記G・M・マレンコフの「第十九回党大会に対する中央委員会の報告二、国内情勢」の農業に關説した部分をあわせ参照した。

註
Директивы XIX съезда партии по пятому пятилетнему плану развития СССР на 1951 - 55 годы, Доклад председателя Высшего государственного совета, М. З. Сабурова. Правда 10/X 1952 г.

《海外ノート》 新五カ年計画における農業発展の目標

Речь тов. Ленинского. Правда 11/X 1952г.
Речь тов. Пономаренко. Правда 12/X 1952г.
Отчетный доклад ЦК ВКП (б) XIX съезду, доклад секретаря ЦК ВКП (б) тов. Г. М. Маленкова. Правда 9 X 1952г.

指令は簡単なもので、特別のイントロダクションもついていないし、計画目標のパーセンテージが示されているだけにすぎない。だが冒頭の次のような言葉から、新五カ年計画における農業発展の基本的な方向はほぼこれを察することが出来る。

「農業部門の主要な任務は今後もやはり次のような点にある。すなわちあらゆる農作物の収量を高め、社会化家畜頭数をさらに増加するとともに、その生産性を大巾に引上げる。コルホーズの共同経営部分を一層強化発展し、農業および畜産業の総生産高と商品生産高とを増加する。農業に最新の技術および農業文化を導入し、これを基礎としてソフホーズとMTS（機械・トラクター・ステーション）の活動を改善する。発達した牧草播種と正しい輪作制を導入し、工芸作物、飼料作物、野菜、馬鈴薯の播種面積の比重を増し、このようにして農業は一層生産的な高水準のものとならねばならない。」

ソ連の農業は、戦後第一回目の五カ年計画（一九四六―五〇年）後半において農業生産がほぼ回復し、穀物問題が解決された後、一の新しい段階に移りつつあることが注目される。――この傾向

は第二次五カ年計画（一九三三—三七年）末から既にみられたが、戦争で中絶していた。それは今日、いわば劃期的な農業生産構造の高度化、コルホーズの経営的技術的内容の充実が急速に進められており、その結果として近い将来農作物の収量および畜産の生産性が増大し、農産物の商品化率が高まり、農民の生活水準もまた引上げられることが期待されている点にある。ソ連の農業政策・農業発展計画の重点が今日この方向におかれていることはいうまでもないであろう。指令上の言葉もまたこのことを具体的に示している」と解される。

ソ連の農業は、大経営化（集団化）および機械化の点だけにかぎるなら、早くから欧米先進国の農業を凌駕しているともいえよう。しかしそれは直接的には穀物問題の解決——工業化に即応して大量の食糧と労働力を都市に供給する——のためにとられた措置であり、主として機械使用による播種面積の拡張によつて穀物を増産し、かつ農村の余剰労働力を他産業へ押し出したが、農業はむしろ粗放化したとみられる。だから農業の集約化という点ではソ連と欧米先進国との間にはかなりの差距が存している。

周知のように、欧米先進国の農業は畜産がその不可欠の構成要素をなしており、畜産高の割合が農業生産高の半分以上に及ぶのが普通であつて（例えば、アメリカ五五％、ドイツ六〇％——一九三七年）、ヘクタール当りの農作物収量および畜産等を占む農産物生産高も当然ソ連よりずっと高くなつてゐる。ソ連のような広大なフロンテヤーをもち機械化大経営方式をとる国の農業が、

小農経営、家族農場を主とする欧米諸国の農業と同一の構造を有する必要は無論ないであろうが、ソ連の農業生産高のなかで畜産高の占める割合は二五％内外にすぎないし（一九三七年）、また果実、蔬菜、工芸作物の生産高も決して多くない。ソ連の農業は穀物生産に偏倚しているといえるだろう。穀物問題が解決された後は他の作物もかなり増えており、一九一三年から一九五二年までの間に総播種面積が一・四倍に増加しているうち、穀物播種面積の増加が五％なのに較べて、工芸作物と野菜・瓜の面積は二・四倍以上、飼料用作物の面積は十一倍以上に増えた（マレンコフ）といわれ、その結果、穀物の総播種面積のうちに占める割合は一九一三年の九〇・一％、一九二九年の八一・三％から五〇年には七〇・三％に減じてはいるが——同年工芸作物の割合は八・四％、野菜・馬鈴薯七・一、飼料作物一四・四％（ソ連経済の現状、『経済研究』三卷三号二二四頁）——たとえばアメリカの六三％、ドイツの六二％——いずれも一九三六年——に較べるとなお著しく大きい。このような遅れた構造のために、ソ連の農業労働は季節的なヒークを崩すことが出来ず、年間を通じて労働力が合理的に利用されないため、農業機械化の進歩にもかかわらず、労働可能人口の二分の一が依然として農村に残留しているような状態である。——アメリカの農業有業人口は戦前すでに総有業人口の五分の一以下であつた。以上の結果、ソ連の農産物の商品化率は四〇％内外（一九三八年）にすぎず、農民の生活水準も相対的に低かつた。

このようにみえてくると、ソ連の農業発展にとつて従来のような穀作・機械化一本槍でなく、その外に、総合的な見地から作物構成の多様化を計り、飼料作物、果樹、蔬菜、工芸作物の播種を一層速かに拡大し、特に畜産の比重を可及的に高める必要のあることは自明であろう。戦後ソ連政府の実施した農業政策は明かにこの方向への前進を示しており、今回の「指令」の意図するところもこのような基盤を省みることによつてよりの確に理解されよう。

一九四九―五一年の「畜産振興三カ年計画」は、戦後穀物問題がすでに解決をみたので、今度は農業のうちで戦争のために最大の打撃を蒙つた畜産業を速かに回復し、かつこの立遅れ部門の発展の基礎を従前のようなコルホーズ農民の私有家畜からコルホーズ、ソフホーズの社会化家畜に移すことによつて畜産問題解決の前提条件を整備しようとするものであつた。その結果「牛、羊、豚、家禽の四つの畜産農場が各コルホーズに設置」された。指令は「社会化家畜の頭数をさらに増加し、その生産性を大巾に高める」、「畜産業の総生産高と商品生産高を増加させる」と強調してゐるが、これは先の畜産振興三カ年計画の成果の上に立つものであり、今日の農業問題の中心が何処にあるかを示している。またマレンコフは指令に関連して「戦後農業の発展で大きな成果が上げられたので、畜産を全面的に発展させることは党や国家の中心的課題となつた」、「畜産発展の第一の任務は今後ともコルホーズの社会化家畜頭数をふやし、同時にその生産性を大巾に引上げることである」と述べ、問題の所在点を一層明確にした。

もともとロシアの農業は粗放な穀作を主とし家畜数は少かつたが、農業集団化の強行のため、主として富農層の手にあつた家畜が大量に損われ、集団化のほぼ完了した一九三三年には全面的集団化前の二八年に比し馬は五一%（一、六九〇万頭）、牛は四六%（三、二一〇万頭）、羊・山羊は六六%（九、六五〇万頭）、豚は五四%（一、三九〇万頭）だけ頭数を減じた（満鉄調査部『ソ連邦の畜産業』序文二頁）。集団化後も農業問題の中心はやはり穀物の増産にあつたので、畜産の発達はむしろコルホーズ農民の私有家畜の飼養にまかせられて来た。第二次五カ年計画末には穀物問題はほぼ解決されたが、家畜頭数はまだ集団化前の水準までには回復しないままに今次大戦を迎えることとなつた。

家畜頭数は今日すでに戦前水準を幾分越えているが、コルホーズおよびソフホーズの社会化家畜の総家畜数のなかに占める割合は、一九五一年には一九三八年の牛三六%、羊・山羊四五%、豚三五%からそれぞれ六六%、七八%、七五%に増加している（『経済研究』三卷三号二二四頁）。このことは畜産業の今後の本格的展開を予想せしめるに足らう。

飼料について一言すれば、ソ連の畜産は今日まで天然の採草地および放牧地に主として依存し、またツンドラや砂漠が多くて牧野の拡張が容易でなく、そのため集団化時代まで広く存在していた三圃式農業の休耕地、刈取後の耕地、灌木地などを放牧に代用して来た。だが天然牧野や代用地は草の収量、質とも

に不良であり、かつ後者は耕種農業に障害をきたすので、新しく人工採草地や人工放牧地をつくることが要請されてきた。また飼料用穀物の播種は食用穀物との競合のためその拡大がはばまれておつた。すなわち飼料の面から畜産の発展がかなりチェックされていたといつてよいであらう。

一九四八年末にはじまつたいわゆる「スターリン自然改造計画」とよばれる一連の植林・ダム・運河・灌漑網などの大建設事業——これは勿論新五カ年計画のなかに組み入れられる——は、農業生産構造を高度化するためのものとも根源的長期的な基盤を準備するものである。この自然改造計画は中央アジアから吹いてくる熱風を遮断し、気候を緩和し、灌漑面積を拡張することによつて、新たに耕地や採草地を開き、既耕地の地力を高め、特に収量の安定と向上を実現し、また畜産業の飼料基礎の拡充に貢献するところが大きいとみられる。すなわち「繁殖した牧草播種、正しい輪作を導入し、工芸作物、飼料作物、野菜、馬鈴薯の播種面積の比重を高め、農業を一層生産的な高水準なものとする」(指令) ことの可能な自然環境を積極的につくり出すわけである。

註、スターリン自然改造計画については的場徳造「戦後ソ連邦の農業建設」本誌第五卷第二号二八九～二九六頁参照。

コルホーズは機械化大経営であるから、このような国家的大事たる自然改造計画に協力し、またこれに即応して自己の経営的技術的内容を強化することが相対的に容易である。一九五〇～五一年に全国的に実施された小規模経営の合併は、コルホーズの数

を一九五〇年一月一日現在の二五万四千から九万七千に整理したが(マレンコフ)、これは「コルホーズの共同経営部分を二層強化発展し」(指令) 農業生産力を向上せしめるための一層大きな展望を開いた。合併によつて多くのコルホーズは畜産や各種の商品作物を導入するための経営的基盤を拡張、機械や技術を一層効率的に利用し、牧草式輪作法を取り入れ、新灌漑方式を採用し得るように、コルホーズの農場と部落の整理・再編成を行うことが可能となつたのである。コルホーズがMTSやソフホーズと協力してこのような可能性をどれだけ現実化し得るかが今後の問題であらう。

註、的場徳造「ソ連邦におけるコルホーズの再編成」本誌第五卷第三号二六〇～二六八頁、および「ソ連邦における農圃灌溉組織の改良」本誌第五卷第二号二九五～二九六頁参照。

以上の諸施策が互に補足し合うことによつて「あらゆる農作物の収量を高めなければならぬ」(指令) わけだが、マレンコフも「播種面積が戦前の水準にもどり、かつこれを上廻つた現在、農産物を増産するただ一つの正しい方針は収量を全面的にひきあげることである。収量の引上げこそ農業の第一の任務である」と述べているし、このことは指令の各所でもくり返し強調されている。

(二)

一九四六～五〇年の第四次五カ年計画における農業生産については、「農業の分野では農作物の収量の点でも総收穫高の点でも、

また畜産の生産高からいっても、戦前水準を大巾に上廻つた（「指令」というが、たとえば穀物收穫高は戦前の五％増であつたのに対し、総播種面積は戦前に二％足りなかつたから、多くの農作物の収量は当然戦前水準を上廻つていたとみられる。また総家畜頭数は戦前を約一二％だけ凌駕していた（以上『経済研究』第三卷第三号二一八頁）。ここを出発点とする第五次五カ年計画の農業生産の目標はどうであらうか。

指令によれば、農作物の五カ年間の増産率は「穀物総收穫高四〇～五〇％、うち小麦五五～六五％、棉花五五～六五％、亚麻纖維四〇～五〇％、甜菜六五～七〇％、馬鈴薯四〇～四五％、向日葵五〇～六〇％、烟草六五～七〇％、極上質紅茶七五％、飼料のそれは「乾草八〇～九〇％、根菜類三～四倍、埋藏飼料^{エンバーク}二倍」と発表され、工芸作物や飼料作物が穀物よりずつと急速に増加するはずだが、穀物のなかでは小麦の増産率が大い。小麦の總收穫高は既に一九五二年に一九四〇年より四八％も上廻つておる（マレンコフ）というが、特に戦後小麦の播種が新しい地方——南東、ウラル、カザフスタン、ザカフカズおよびバルト三共和国——で急速に拡大されていることが注目される。

また畜産物の増産率は「肉・脂肪八〇～九〇％、牛乳四五～五〇％、羊毛二～二・五倍……鶏卵（社会化家禽のみ）六～七倍」と定められ、家畜頭数の増加予定は「牛一八～二〇％、うちコルホーズのもの三六～三八％、……羊六〇～六二％、うちコルホーズのもの七五～八〇％、豚四五～五〇％、うちコルホーズのもの

八五～九〇％、……馬一〇～一二％、うちコルホーズのもの一四～一六％」となつてゐる。畜産についてはコルホーズの社会化畜の急速な増加が注目を要する。また大家畜よりも増加の容易な中家畜にむしる重点がおかれてゐるようである。馬の増加率が大きいのは、トラクターの普及してゐるソ連では役畜としての馬の地位がすでに重要でなくなつたからに外ならない。

これらの増産率は先行の五カ年計画と較べて一般的により高く、かつバランスのとれたものだといふことができよう。これらの増産率を、例えば、一九三三～三七年の第二次五カ年計画実績と比較してみると、後者の増産率は穀物二三％、棉花一九％中央アジアで他の作物を犠牲にして棉花の大増産がなされた、第三次五カ年計画では三〇％に下つてゐる）、甜菜二三三％（一九三二年が前年の半分以下に激減してゐるためで、三〇、三一年に比すれば五〇％程度の増加になる）、家畜頭数の増加は牛二五％、馬一七・六％（減）、羊・山羊二八％、豚一一三％であつた。すなわち棉花、甜菜、豚などは第五次五カ年計画よりむしろ増産率は大きい、不安定であり、馬は逆に減少してゐる。

特に第二次五カ年計画とのみ比較したのは、相対的に安定した時期を選んだからにすぎない。第一次五カ年計画はまだ集団化の渦中にあつたし、第三次五カ年計画は戦争のため中絶し、また第四次五カ年計画は戦災復興が主であつたからという理由で、一応この場合の比較からは除外した。

指令は作物別、家畜別の總收穫高ないし頭数増加のパーセンテ

ージの外に、五カ年後に到達すべきヘクタール当りの収量と家畜一頭当りの生産物採取量を発表している。発表は地域別になされており、地域別数字の平均を全ソ的なものとみていいかどうか不明なので、先行五カ年計画の全ソ平均収量とは比較出来ないが、発表された限りでの地域別収量は、従来の全ソ的な数字を極めて大巾に上廻り、国際的水準からみても決して低いものではない。なお灌漑地の収量は地域別平均収量に較べて一倍半ないし二倍に近い圧倒的な高さをもち、自然改造計画の一部としての灌漑網建設の効果に大きな期待がかけられていることが判る。

註、地域別収量の意味するところについてはさらに詳細な検討を要しよう。

指令によれば、穀物のヘクタール当り収量は「南部ウクライナおよび北部カフカーズ——二〇〇二二キントール、特に灌漑地——三〇〇三四キントール。沿ヴォルガ地方——一四〇一五キントール、特に灌漑地——二五〇二八キントール。中央黒土地方——一七〇一八キントール、特に灌漑地——三〇〇三四キントール。非黒土地方——一七〇一九キントール。ウラル・シベリヤ・カザフスタン北東部——一五〇一六キントール、特に灌漑地——二四〇二六キントール。ザカフカーズ——二〇〇二二キントール、特に灌漑地——三〇〇四〇キントール」にまで高められる予定である。

灌漑地は一応別として、ヘクタール当り穀物収量は沿ヴォルガ地方の一四〇一五キントールから南ウクライナ・北部カフカーズ

およびザカフカーズの二〇〇二二キントールの間にある。これは一九三七年の全ソ平均一・五キントール、一九五〇年の目標一二キントールに較べて二割ないし八割高いし、諸外国と比較すると(かりに小麦をとる)、ハンガリー一三・九キントール(一九五〇年)、イタリー一六・二キントール(同年)、フランス一七・八キントール(同年)などとほぼ匹敵する水準にあるとみられる。

「水稻の収量は四〇〇五〇キントールに達する」というが、これは一九五〇年の目標三五キントールをずっと上廻り、わが国の四〇・一キントール(一九五〇年)を超越してスペインの六三キントール(一九三四一三五年、一九五〇年は四一・四キントール)、イタリーの五五キントール(一九三八年、一九五〇年は四七・六キントール)に迫る高収量となる。

棉花のヘクタール当り収量は「中央アジア・カザフスタン南部——二六〇二七キントール、ザカフカーズ——二五〇二七キントール、欧露南部——灌漑地——一〇一三キントール、非灌漑地五〇七キントール」にまで引上げられる。一九三七年の全ソ平均収量は一二・二キントール、一九五〇年の目標は一八・四キントールであつたが、ソ連の棉作は収量の高い上記の三つの地方が戦前七五%を占めていたことを考えると、今次五カ年計画の目標は五〇年に較べて三割内外の引上げとなるであらう。

註、以上の目標収量は異常に高いもののようにみえる。たとえば、FAOの年鑑によると、一九五〇年にインドのヘクタール当り棉花収量は一・一キントール、アメリカは三・〇キン

タール、エジプトは四・六キントールであつた。その場合ッ連については一九三四～三八年の平均収量があげられているだけだが、それは三・二キントールとなつており、「指令」の数字と同一の計算方法によつていかどうか不明で、したがつてそのままの比較には疑問がある。

甜菜のヘクタール当り収量は「ウクライナ・モルダヴィヤおよび北カフカース——二五五～二六五キントール、中央黒土地方——二〇〇～二一〇キントール、中央アジアおよびカザフスタン——四〇〇～四二五キントール」に達する予定である。一九三七年の全ソ平均収量は一八三・一キントール、一九五〇年目標は一九五キントールであつた。ソ連の甜菜の作付面積は戦前ウクライナ六八%、中央黒土地方二八%であつたから、全ソ平均的な収量増加は一・二割とふまれよう。中央アジア、カザフスタンの特に高い収量は全体にはほとんど影響をもたないであろう。諸外国の収量と比較すると、西ドイツ三八三キントール（一九五〇年）、フランス三三〇キントール（同年）にはなお及ばず、イタリー二五七キントール（同年）、ポーランド二二二キントール（同年）、あたりとほぼ同一水準とみてよからう。

播種面積の増加目標は発表されない。「一九五二年にはすべての農作物の播種面積は戦前水準を五三〇万ヘクタール上廻つた」（マレンコフ）との記述に従つて、五二年の播種面積が一五、五三〇万ヘクタールになり、戦前より三・七%だけ多いことが判明するだけであるが、「収量を高めることによつて重要作物の総生

産高をずつと増すことが出来る。総生産高の増加のうち収量の引上げから得られるものが、穀物では約九〇%（第四次計画では六五%の予定であつた——ベネジクトフ）、原棉では約五〇%、甜菜では六〇%以上になるであろう」（指令）というように計画目標達成の成否かほとんど収量の引上げにかかつていることからみて、新五カ年計画における播種面積の増大はさして大きいものではないようである。なお以上の増産率および収量増加からみて、今五カ年計画期間に播種面積の構成が作物別にみても地域別にみてもかなり変化することが予想される。

畜産についていえば、コルホーズの牝牛一頭当りの搾乳量は非黒土地方——一、八〇〇～二、〇〇〇キログラム、南部地方および沿ヴォルガ地方——一、六〇〇～一、九〇〇キログラム、シベリヤ・ウラル・カザフスタン——一、五〇〇～一、七〇〇キログラム、中央アジア——七〇〇～九〇〇キログラム……まで高められ、「コルホーズの緬羊一頭当りの剪毛量は、南・北カフカース——優良種五・二～五・八キログラム、普通種四・二～四・八キログラム、中央黒土地方——優良種四・二～五キログラム、普通種四・四～二キログラム、……シベリヤ——優良種四・三～四・九キログラム、普通種三・八～四・二キログラムまで引上げられる」（指令）予定である。搾乳量については一九三五年のコルホーズ平均一、一五〇キログラム、剪毛量については同じく三五年の全ソ平均一・四二キログラムという数字しか判明しないので、第五次五カ年計画の目標については適切な判断を下し得ない。諸外国の搾乳量はデン

《海外ノート》 新五カ年計画における農業発展の目標

マーク——三、四二五キログラム（一九五〇年）、アメリカ——二、四〇〇キログラム（同年）、フランス——一、九四〇キログラム（同年）であつた。また剪毛量はアメリカ——三、六四キログラム（一九三五年）、オーストラリア——三、七キログラム（一九三二年）であつた。ソ連の搾乳量の目標はフランスに及ばず、水準はまだ低いとみられるが、剪毛量の目標は諸国より数量的には大きくなつてゐる。

註、ソ連以外の諸国の数字は次の統計書からとつた。

FAO, Yearbook of Food and Agriculture Statistics

1952. Vol. V, Part 1 Production.

A. S. Moljke, СССР-н сельскохозяйственное производство, 1940г.

東亞研究所編『世界農業統計（一九二五～四〇年）』

最後に、ソ連の第五次五カ年計画末における主要な農作物の生産高および家畜頭数を一括して示せば下表の通りである。

第一表から明かなように、主要農作物の生産高は一九五〇年に戦前の水準を上廻つてゐる。第五次五カ年計画が遂行されるれば穀物のごときは一億七四二〇万トンの生産高に達し、五カ年間の増加は五千万トン弱の見込みである。また「一九五五年の穀物の総收穫高は帝政時代の豊作の年の二倍以上の大きさに達するであろう」（ベネデクトフ）ともいう。一億二千万トン内外の生産高において、ソ連が穀物を自給した上に毎年恐らく数百万トンの軍需ストックの外に、一〇〇～二〇〇万トンの輸出余剰を持つに至つたことを考慮するならば、国内消費の増加を充分計算にいれても五

第 1 表 農 作 物 生 産 高

	1940年	1945年	1950年	1952年	1955年 (計画)
穀物(一万トン)	11,967	6,701	12,530	13,104	17,420
棉花(ト)	270	130	375	394	581
甜菜(ト)	2,130	867	2,341	2,790	3,863

〔註〕 1940, 45, 50年の数字は『経済研究』3巻3号218頁による。1952年の数字はマレンコフの報告から推算した。棉花と甜菜は1951年の数字である。1955年の数字は1950年の数字に「指令」の増産率をかけたものである。

第 2 表 家 畜 頭 数

	1928年	1940年	1945年	1950年	1952年	1955年 (計画)
牛 (一万頭)	7,050	4,740	4,695	5,720	6,035	6,749
馬 (ト)	3,305	1,760	1,051	1,370	1,611	1,507
山羊 (ト)	14,070	8,550	6,941	9,900	11,121	15,840
豚 (ト)	2,600	2,230	1,042	2,410	2,600	3,494

〔註〕1928年は満鉄調査部『ソ連邦の畜産業』120頁。1940, 45, 50年は『経済研究』3巻3号218頁。1952年はマレンコフ報告より推算。馬の頭数には疑問がある。1955年は50年の頭数に増加率をかけたもの。

年後のソ連の穀物輸出余剰は莫大な量に達し、その世界穀物市場に及ぼすべき影響力は眞に怖るべきものがある。なお指令には「不測の事態に備えて国家の安全を確保する」ために、「五カ年間に食糧予備を二倍にする」ことが述べられてゐる。

註、ソ連の穀物増産計画には食用穀物、特に小麦の増産——

れに應じて小麦の消費が著増し、ソ連名物の黒パンは麥を消費すである——の外に、家畜頭数や畜産品の増加に対応する大幅の飼料用穀物の増大が見込まれているものと想像される。また一九四五年以後は以前に較べて領土が拡張されている。ソ連の穀物輸出余剰を評量する場合には、人口増および家畜頭数の増加による国内穀物消費の増大を考慮しなくてはならないことは勿論である。ソ連の穀物輸出は一九〇九—一三年平均は一〇五五万トンであつたが、一七年以後激減し、一九三〇年の四七六万トン、三一年の五〇五万トンを最高とし、他の年には概ね一〇〇万から二〇〇万トンの間を上下して——特別に少なかつた年は除く——今日に至っている。なお輸出穀物の四—五割が小麦である。いまかりにソ連が五千万トンの穀物増産部分のうち一〇〇〇—二〇〇〇万トンを輸出し得るとすれば、それは世界穀物市場価格を左右する力を持ち、FAOの存在を脅かすかもしれない。なおソ連衛星国における穀物の生産と消費をもあわせ考える必要があろう。またソ連がいかなる目的でこのような穀物の大増産をなすのか、その包蔵する政治的意図も大いに問題とならざるを得まい。

第二表にみる通り、家畜頭数の増加もまた顯著なものがあり、馬を除けば一九五〇年にはすでに戦前水準を突破しておるが、一九五五年においても馬は勿論、牛もまた一九二八年の水準に回復せず、羊・山羊および豚のような中家畜が一九二八年の水準を上

廻る程度にすぎない。集団化のソ連畜産業に与えた打撃の深刻さ、畜産の立遅れのほどがうかがわれよう。ただし、優良品種の導入や飼養法の改良によつて畜産物の生産高が急速に増加していることは先にみたとおりである。

なお大都市および工業中心地の周辺に馬鈴薯、野菜、および畜産の基地を設け、また五カ年間にコルホーズの蔬菜畑およびイチゴ畑を七〇%、葡萄畑を五〇%、茶畑を六〇%、また柑橘畑を四・五倍に増加する計画のあることもつけ加えておかねばならない。

(三)

新五カ年計画における農業発展の基本方向が農業生産構造の高度化、コルホーズの經營的技術的内容の充実にあり、その最も根源的な物的基礎が自然改造計画に存することを論じ、次いでこの基本方向を貫くに必要とされる計画生産目標を検討し、その重点が農産物収量および畜産生産性の向上にあることを指摘したが、かかる計画目標達成の諸條件はどうであらうか。

まず今次計画における国家の農業投資は、第四次五カ年計画の一九〇億ルーブルの二・一倍、すなわち三九九億ルーブルになるはずで、うち第四次計画の四倍に当る八〇億ルーブルが灌漑および土地改良へ向けられる。これ以上、投資の内訳は判明しないが、従来はMTSの機械およびソフホーズの家畜の増加に当てるものが主であつた。第四次計画では、この外にコルホーズ自身の農業投資が三八〇億ルーブルに上つた。コルホーズが合併によつてよ

り充実し、かつ「コルホーズの不可分基金（コルホーズの自己資産）が本年（一九五二年）初には一九四〇年に比し二倍以上に増加している」（ベネズエラ）ことを考慮すれば、今次計画でもコルホーズ自身の手で一層多額の投資がなされるものとみられる。

なお自然改造計画の名でよばれる植林・運河・ダム・灌漑網の建設がどの程度までこの農業投資の部分でまかなわれるかは判明しない。

自然改造計画による農場保護林の設置は一九四九～六五年の十五年間にわたり、この二年半ですでに二六〇万ヘクタールの植樹がなされたというが、今次計画でも「コルホーズ、ソフホーズで二五〇万ヘクタールの保護林の植樹がなされ、また二五〇万ヘクタールの国有林の橋種と植苗がなされる」（指令）はずである。前者の計画と後者の計画との関係は明かでない。

灌漑および開墾計画については、自然改造計画という名で一括されている六つの建設事業とは恐らく別だと思いが、本計画ではシベリヤ、中央黒土州、アゼルバイジャン、中央アジア、北カフカースなどにおける灌漑網の建設があげられている。五カ年間にコルホーズおよびソフホーズの灌漑面積は三〇～三五%だけ拡張される見込である。また白ロシア、バルト三共和国、ロシア共和国の北西部、中央部その他の沼沢や低湿地の干拓によつて干拓地の面積は四〇～四五%増加するという（以上指令）。

註、灌漑耕地の面積は一九三八年六、一七七、〇〇〇ヘクタールと評価され、うち三分の二は中央アジアとカザフスタンにあ

る（N. Jazny, The Socialized Agriculture of the USSR, 1949, p. 117）。ただしこの数字からただちに上記灌漑計画面積の大きさを計算するには色々問題がある。

これらの植林・灌漑・開墾工事の成否が土木機械の供給、地元のコルホーズ農民の労働力提供の如何にかかっていることはいうまでもない。これらの工事が作物構成の変化、牧草輪作法をはじめとする新しい耕作方法の導入、収量向上の基盤をなしていることは先に述べたとおりである。

戦後MTSは従来の主としてコルホーズ農地の耕耘を行うものの外に、新に造林ステーション、草原改良ステーション（干拓・土地改良を行う）、機械畜産ステーションが設置され、「その総数は今日八、九三九に達している」（マレンコフ）。したがって機械使用は穀作のみでなく、畜産、野菜・果樹の栽培、農産物の運搬、造林、開拓や干拓などの部面にもおしひろげられ、また新しい専門機種もすでに多数製作せられている。このことは機械化が農業部面の他の施策と呼応して機械のより高度な総合的利用の方向に進んでいることを示すものである。

MTSのトラクター保有量は、「今次計画末には五〇%増加する」（指令）はずだから、一九五〇年の六四万三千台から九五万台に達しよう。そのために「一九五五年にはコルホーズの農場で用されるトラクター馬力数は播種面積一〇〇ヘクタールにつき一九四〇年に較べて七〇%、一九五〇年に較べて三〇%増加する」（指令）。また「MTSは現在コルホーズにおいて一九四〇年の九

○種に対し一七〇種の作業を行つている。…コルホーズにおけるトラクター作業量は本年（一九五二年）戦前水準を八八％だけ突破している」（ベネザクトフ）という。以上の結果として、農作業の機械化率は一九五〇年の耕耘八〇％、播種、收穫各々五〇％とみられる水準から、一九五五年には穀物、飼料作物、工業作物について耕耘と播種各々九〇％、收穫八〇～九〇％（穀物と向日葵のみ）というバランスのとれた、しかも高い水準に引上げられる予定である。それと同時に甜菜の收穫は九〇～九五％、棉花の收穫は六〇～七〇％、馬鈴薯の植つけ、中耕、收穫は五五～六〇％、草刈とエンシレージは七〇～八〇％まで機械化されることになっている（以上指令による）。

コルホーズの合併強化にもかかわらず、農業における主要な生産手段の所有者としてのMTSのコルホーズに対する指導的役割、あるいは種子や種畜の生産者ないし各種の専門農場、模範農場としてのソフホーズの地位は愈々重要性を加えつつあるようであり、「指令」や最近のスターリンの論文『ソ連における社会主義経済学の諸問題』もこのことに触れている。

また今次計画中には高収量の穀物、生産的かつ早成の棉花、糖分の高い甜菜、含油分の多い向日葵などの新品種が導入され、また灌漑面積の拡大にともない、各種の作物を新しい地方で栽培することが予定されている。また収量の引上げに關係の深い肥料についていえば、一九五〇年の鉱物肥料の供給量は五一〇万トンであり、今次計画では鉱物肥料の生産は八八％増加するといふか

ら、一九五五年には肥料供給量は八〇〇～九〇〇万トンに増加することが予想される。家畜数の増加によつて厩肥の施用量が増すことはいうまでもあるまい。

畜産の生産性の向上は第一に飼料の量と質にかかつているわけだが、戦後ソ連の飼料生産は家畜頭数から立遅れていたもので、今次計画では、上にもみた通り、牧草播種面積の拡張、飼料の質の改善に力が注がれるはずである。また乳牛に対しては地域によつて集約的な舍飼の方法が積極的にとり入れられる。戦後ソ連では二六の生産性の高い家畜品種がつくり出されたといわれる。

コルホーズは農業発展のより高次の段階に対応すべく合併・再編成かなされたわけだが、新五カ年計画の課題を遂行するには、速かにその経営的技術的内容を充実することが要請されている。そのためには再編成の実施に当つてあくまで生産的任務を第一とする立場を貫き、「一切の努力をあげて多角的農業生産のより一層の発展に集中し、その経済的可能性と自然條件を極度に利用して、穀物、棉花、甜菜、麻、馬鈴薯、肉、ミルク、卵、羊毛、野菜、果物その他農産物を全面的に増産する必要がある」（マレンコフ）、またコルホーズ財産の私服や農業アルテリ規約の違反を一掃し、労働組織をより合理的なものにすることが急務たとするマレンコフの批判が全面的に承服された。

コルホーズの経営的技術的強化に即応して、第五次五カ年計画における農業労働生産性の増大は四〇％と発表され、工業労働生産性の増大五〇％にかなり接近してきているが、このことは農業

の機械化、有畜化の一層の発展、農業生産構造の高度化に基いて、農業労働の性質が変化しつつあることの例証として興味深い。この結果、コルホーズ農民の貨幣ならびに現物所得は四〇％だけ増加するはずである。

また新五カ年計画における農産物、殊に畜産品や工芸作物、果物、蔬菜などのような商品作物の増産が実現すれば、農産物の市場出廻量は著しく増加せられ、それは農産物の価格を引下げ、ソ連国民の消費水準を向上させると同時に、農産物ストックおよび輸出余剰を急増することが期待される。

註 一九五二年の穀物調達計画は順調に遂行されており、例えば、同年の小麦調達量は一九四〇年に比して遙かに増加し、その結果、穀物調達中に占める小麦の割合は四三％から六一％に上昇した。また一九五一年は一九四八年に比し、牛乳は一・四倍、肉、羊毛、皮革は一・五倍以上多く調達された。さらに一九五一年は一九四〇年に比し棉花と甜菜の調達量は著しく増加し、茶は八三％、果物は四二％、皮革は三倍だけそれぞれ多かつた。(ボノマレンコによる)。

これで粗雑なノートを終る。新五カ年計画が提起している問題は、いわゆる「ソ連における社会主義から共産主義への漸次的移行」という観点からこれを論ずることも出来ようが、それらについては別の機会に譲りたい。